**令和５年度第２回登別市市民自治推進委員会議事録**

（敬称略）

◆　開催日時：令和５年７月２８日（金）１８：３０～１９：４０

◆　開催場所：登別市民会館　２階中ホール

◆　出席委員：１８名

仲川委員長、山田副委員長、合田副委員長、田渕委員、鎌田委員、今委員、雨洗委員、坂東委員、吉田委員、荒川委員、冨永委員、工藤委員、大熊委員、神谷委員、磯田委員、寺山委員

◆　協働推進庁内委員：土門委員、安部委員

◆　事　務　局：田中市民生活部長、笠井市民生活部次長、大越市民協働グループ総括主幹、鳥海主査、相馬担当員、松下担当員

**【市からの情報提供（１）：脱炭素に向けた取組について】（資料投影）**

　市民生活部環境対策グループ会田主査より、下記のとおり説明があった。

登別市は、令和４年２月に「ゼロカーボンシティ」への挑戦を表明しており、国や北海道でも示されている「２０５０年のＣＯ２排出量実質ゼロ」を大きな目標として、各種の取組を進めている。その取組の中で、市が市民に向けて行っている補助制度について説明する。

　「住宅に関連するもの」と「生活に関連するもの」大きく２つに分かれており、住宅関連の補助制度は、

１つ目が「ＺＥＨの要件を満たす自宅の新築または購入に関する補助金」ゼット、イー、エイチと書いて「ゼッチ」と読み、ゼッチは、ネット・ゼロ・エネルギー・ハウスの頭文字を取った略語で、使用するエネルギーと、太陽光発電などで創るエネルギーの量をプラスマイナスゼロ以下にする家のこと示す。ＺＥＨ住宅の建築主、もしくは新築建売住宅を購入する者が補助対象である。

　２つ目、「自宅の断熱改修に関する補助金」は、高性能建材を使って自宅のすべての窓をリフォームすることが主な要件となる。

３つ目、「自宅の給湯器の更新工事に関する補助金」について、灯油を使用した給湯器から、省エネ性能が高いエコキュート、エコジョーズプラスコレモなど、既存の灯油を使用した給湯器に対して、３０％以上のＣＯ２削減効果が得られるものが対象となる。

　住宅関連の補助金の申請受付は、８月３１日までを期限とする。

生活関連の補助制度は、生ごみ処理機等購入補助金と宅配ボックス購入補助金の２つ。生ごみ処理機等購入補助金は「電動生ごみ処理機」や「生ごみたい肥化容器、コンポスト」を購入する市民に対して、購入費用の一部を補助するもの。

宅配ボックスの購入補助金は、宅配ボックスを購入・設置する市民に対して、購入・設置費用を補助するもの。

生ごみ処理機、宅配ボックスは、市内の登録販売店で購入する必要がある。

これら両者の補助金は、申請状況、予算の執行状況により２次募集を行う考えでいる。

最後に、補助金を活用する場合は、市に対して補助金の申請し、市から申請者に補助の交付決定をした後に、住宅工事の契約や商品の発注、購入することが条件である。

質問：生ゴミ処理機、宅配ボックスについて、現在の申請状況を教えてほしい。

回答：生ゴミ処理機７件　宅配ボックス１１件　いずれも枠に余裕があるので申込みは可能である。また、応募多数の場合は抽選となる。

質問：住宅関係の補助金は、設備機器が主となるが、設備は劣化するものである。脱炭素に向けてとあるが、機器が経年劣化することで、排出量や使用電力などが上がるのではないかと考えるが、メンテナンスを含めて機器の能力が低下することに対してはどのように考えているのか。事前に申請の段階でこれらを加味したのか。

回答：国の補助制度を使って行うものであるので、国の基準に沿った内容で申請することとなる。

意見：古い機器類については、電力も使うのでその分排出量も増えると思うので、そのあたりのフォローも今後検討してほしい。

**【市からの情報提供（２）：公共交通空白地域（柏木地区・常盤地区）の実証実験について】（資料投影）**

市民生活部市民協働グループ北出主査より、下記のとおり説明があった。

実証実験の目的は、常盤町と柏木町は、JR駅やバス停が周囲にない「公共交通空白地域」となっており、生活の足の検討が必要。

令和２年に実施したアンケート調査では、コミュニティバス等のきめ細かい交通を直ぐに利用したいと回答した方が２割で、将来的に利用したいと回答した方が６割であった。そのため、実際にバスを運行して利用ニーズを把握し、必要な交通施策を検討していく基礎データを得るために実施する。

実証実験の概要として、実施主体は登別市とし、市バスを活用し実施する。実施時期は７月１１日から８月２９日の間で、利用料金は実証実験中であることから無料。当該地域の人口は3,585人で高齢化率37.9％。（令和５年５月末現在）

運行ルートについては、JR幌別駅からショッピングセンターアーニス、常盤町に向かい、幌別浄水場から柏木町に向かい、富士町にあるホームストア付近を経由してJR幌別駅に戻る反時計回りの１周コースとしている。乗降場所は３００ｍ～５００ｍの間隔で考えており、乗降場所には、目印となる「のぼり旗」を設置する。また既存バス停からは１０ｍ以上離して設置する。

　富士町のホームストア等については、柏木町の方がよく利用していることから経由する。

　バスの時刻表について、午前４便、午後３便を考えており、８時の便は市内病院の受付時間に合わせて設定し、９時の便は商業施設の開店時間に設定した。１０時、１１時の便については、計画策定時のアンケート調査から、買物に係る時間でニーズが多かった３０分と１時間を想定し設定した。

午後の便は、午後１で買い物に出かける方、室蘭市の病院の帰りの時間を想定し設定した。そのため、道南バスやJRとの接続も考慮している。

　なお、１０時の便から富士郵便局前からはじまるのは、反時計回りのみの運行であり、柏木町の方が富士郵便局で下車し、用事を終え帰るためには、次の便で幌別駅前でいき、その次の便で柏木町まで乗車することとなるため、はじまりを富士郵便局に設定した。

　次に運行カレンダーについて、市バスは他の公務でも利用するため、比較的空いている日で調整し、７月と８月の平日の火曜、金曜とした。８月１１日（金）は山の日で祝日となっており、市バスの運行はない。

　次に乗車アンケートについて、利用者に対し乗車時にアンケート調査を実施する。利用者の年齢層や免許の所有状況などその方の属性を確認する設問のほか、市バスでの移動目的や頻度を確認する設問、乗車してみての感想、利用者負担を求めた場合の料金設定を設問内容とした。このアンケートを集計し、必要な公共交通を検討するための基礎データの１つとしたい。

実証実験終了後には、町内会への事後報告と併せて、再度意見を伺いたいと考えている。

また、市では、この実証実験の内容に基づき、利用人数を参考に次の段階として、バスがいいのか、ワゴンタイプがいいのか、どのような車両の大きさが合うのか、人数が少ない場合は、既存のタクシーを活用した相乗りやチケット補助の方法がいいのか、など様々なケースを想定して、常盤町や柏木町の実情にあった公共交通の在り方を検討するが、他の自治体の例では、実証実験のときは無料なこともあり利用は多いが、いざ有料で試験的運行や本格運行になったときには利用者が大幅に減りほぼ空車で走ることも珍しくないようで、経営の採算ラインを下回るといった事例もある。

このように、社会や経済の仕組みとして、需要と供給のバランスが大事である。また、公共交通においてもSDGｓの目標の中で、「つくる責任　つかう責任」があり、つくる側は市、使う側は市民との位置付けで仕組みを作ったが、期待した効果を大きく下回ったということがないように、市と市民それぞれの立場で責任を果たすことが公共交通には特に重要との認識を、市長はじめ担当部で共有しているので、皆さんもこのことを強く意識していただきたい。

市は、実効性のある公共交通の方法を有識者が入った「地域公共交通活性化協議会」で検討していくので、今回の実証実験を利用する方々には、重ねてのお願いとなるが、初めて利用する際の乗車時に、市が用意したアンケート調査に感想等の記載をお願いする。実際に利用した方々の声が今後の検討に非常に大事になるので、協力をお願いする。

質問：現在の利用状況や利用した方の評判を聞きたい。

回答：初日について、天気が悪い中、２便目２６人の利用があった。天気の良い日も運行しているが、２便目のニーズが多く、２０人程度の利用があった。午後の便については、日によるが２桁の利用があり、利用が１桁と少ない便は、１便と７便であった。利用者の感想としては、感謝の言葉の他、アーニス前バス停の路上駐車車両の交通整理をしてほしい、バス停位置を変更してほしいなどの意見があった。最終的にいただいた感想等を加味しながら検討したい。

質問：登別温泉で運行するオニスロでは、運賃を２００円と設定している。高校生からは安いという意見があったが、実際に利用した方には高いという意見があった。市外ではワンコインで運行しているところもあるが、運賃はどの程度想定しているのか。

回答：本格運行する場合、車両の規模、既存の交通事業者との共存や営業エリアの重複を避けるなどを踏まえた料金設定とするよう検討したい。

質問：利用者は年配の方が多いと思うので、バス停間の距離が３００ｍ～５００ｍだと遠いと感じる。オニスロのように手を上げたら乗車できる設定は如何か。利便性が上がり利用者数も増えるのでは。

回答：バス停の設定にあたっては、路線バスのバス停設置の考え方や北海道警察のバス停設置基準を参考に設定している。今後、アンケート調査を踏まえるとともに、関係町内会の意見等を加味しながらニーズを把握していく。

質問：今回の実証実験についての周知方法と学生の利用について聞きたい。

回答：アンケートに年齢層をチェックする項目があるが、今のところ学生の年代に相当する方はほぼいない。通学目的ではないが、２０歳前の方が２回ほど利用したことがある。ほとんどの利用者が高齢者である。

　　　また、周知の方法は、市公式ウェブサイト、LINE、Facebook、広報紙、町内会回覧のほか、常盤町、柏木町の沿線の住戸にチラシを配布、登別中央ショッピングセンターアーニスに協力のもと、買物客へのチラシを配布するなど、周知を行った。

質問：対象の地域に住んでいない人はバスに乗れないのか。

回答：路線から外れている地域の方を含めてどなたでも利用できる。

【**４月以降の各部会取組状況について**】

**○ぬくもり部会**

今年度は、８月から９月にかけての開催を見込んでおり、昨年度説明を受けた保健福祉分野における市の施策に関連したことなど、今後、部会として取り組めることを検討していく予定。

**○防災・環境部会**

８月から９月にかけての開催を見込んでおり、来年度の登別市総合防災訓練に向けた取組の検討のほか、防災や環境などの分野を中心に、部会として取り組めることを検討していく予定。

**○産業躍動部会**

登別を広くPRすることを目的に、登別国際観光コンベンション協会のインスタグラムを活用した取組を進めている。

今月の産業躍動部会で、インスタグラムの投稿におけるルールを協議し、登別国際観光コンベンション協会に投げかけているところ。同協会の最終確認が得られれば、登別青嶺高等学校の生徒会の学生と部会員による投稿を開始し、検証を重ねながら登別を広くPRするという目的に沿うような取り組みを進めていく予定。

**○都市調和部会**

新しい市役所庁舎と庁舎前広場について、本庁舎整備推進グループより説明と意見交換を行った。引き続き本庁舎整備推進グループと意見交換を行いながら、広場の使い道など、部会として取組可能なものについて協議を進める。

**○育み部会**

毎月第３土曜日（１０時～１２時）にアーニス２階に開設している絵本コーナー「ブックファームあーにす」において、読書活動団体による読み聞かせや、市民から寄贈いただいた絵本を自由に読める空間を提供しており、毎月最終月曜日開催の部会において、読み聞かせの振り返りや、次回に向けた意見交換等を行った。また、公園の利活用を目的とした取組である「のびのび公園」でのボール遊びを６月１日から開始。引き続き、子ども達に絵本を触れ合う機会や、外で元気いっぱいに遊べる機会を提供できるよう部会で協議を進めていく。

**○まちづくり部会**

昨年度から続けている市役所現庁舎跡地の利活用について、進捗状況を部会員で共有したほか、まちづくり部会として、今後どのような取組を行えるか意見交換を行った。引き続き、登別市中央地区まちづくり協議会の協議内容について議論するほかに、部会としての新たな取組みを検討する。

**【意見交換：市民自治推進委員会の方向性について】**

委員長：市民自治推進委員会の全体会議は８年間行われており、これまで「健康」をテーマに各部会でそれぞれ取組を行ってきたところである。市民自治推進委員会は市民の意見を集約するような位置づけとなっており、市は市民の意向がなければ物事を変えれないものである。この委員会は色々な団体に所属する方が委員となっており、市民自治推進委員会の意見は、市民の意見の代表であると考える。これから市の事業や開催される様々なイベントなど、色々と検討していくことが増えていくとなると、市民自治推進委員会全体で考えるテーマが必要となってくるのではと考えている。本日はテーマを決めるのではなく、皆さんが思う市民自治推進委員会の今後の進め方について、ざっくばらんに意見を聞きたい。

委　員：市民自治として１つの共通的なテーマを持って、そこから各部会で議論しながら持ち寄って、そして全体会議で話し合う。市民の求めていることを反映していくことが大事である。登別青嶺高等学校では、単位制となり、その中で地元学というものがある。昨年のじもと学における発表会の場で、観光に着目している学生が多かった。今年は更にそれを発展させる取組を行おうとしている。市民自治推進委員会がどのようにコラボレーションできるか分からないが、観光を共通のテーマとしても良いのではないか。また、行政や議会から発せられる条例について、市民自治推進委員会が議論すべきではないかと考える。

委員長：まず各部会でそれぞれ取組を進めるほか、市民自治推進委員会全体で共通のテーマを設け、例えば、登別市連合町内会では「観光と福祉のまち登別を目指している」とあるように、市民自治推進委員会としては観光と福祉のまちについてどのように関われるかなど、１つのテーマとして設けて進める方法は如何か。また、１つのテーマを１つの部会ができることではないと思うので、全体会議で話し合った中で、この部分はこの部会で検討し、また全体会議にあげてもらい、皆で内容を作り上げていくという方法は如何か。

副委員長：どうしても目先のことを優先してしまう。基本的なことをどのように進めていくか。登別のまちをどういうまちにしたいか、市民、議会、行政がどう考えているのか。なかなか見えてこないのが実態である。ただし、登別の基幹産業は観光である。観光都市としてどうあるべきかということをやはり市民自治推進委員会が考えないと中々できないのではないか。地域に住んでいる人が「私は観光都市登別に住んでいる。」という思いがないように感じる。観光都市としての福祉の在り方、安全の在り方、教育の在り方など、六つの部会が観光都市としてどうあるべきかを考えて、それを１つのものして観光都市というのはこういうまちのことを言うんだと、行政や議会より市民が発信できるよう個人が認識できることが大事である。基本条例に基づいて口火を切るのは市民自治推進委員会である。

委員長：コロナが明けたこともあるので全体会議を頻繁に開催したいと考えている。この１、２か月の間に部会を開催し、市の施策などで説明してほしいことや必要な情報がある場合、全体会議の場で挙げてほしい。また、それぞれの部会の活動は継続することとし、その一方で、市民の意識の醸成を図るために、観光都市として登別はどうあるべきかなど、市民自治推進委員会の共通テーマを考えてほしい。それを１０月頃に全体会議で話し合いたい。市民自治推進委員会を立ち上げてよかったと思える組織にしていきたいので協力をお願いする。

委　員：最近、「全市観光」という言葉が意気消沈している感じがするので、これこそ市民自治推進委員会で協議すべきでは。

委員長：今のような意見を部会で話しあって全体会議の場であげるようお願いする。